

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2019年度研究成果報告書**

|  |  |                |           |
|--|--|----------------|-----------|
| <b>研究科名</b>  | 立教大学大学院 キリスト教学   | 研究科 キリスト教学     | 専攻        |
| <b>研究代表者</b><br>(2020年3月現在<br>のものを記入)                    | 在籍課程・学年・学生番号   | 氏名             |           |
|  | <input checked="" type="checkbox"/> 博士前期課程 3年<br><input type="checkbox"/> 博士後期課程 年<br>(学生番号: 17nh0011) | 川越 菜都美 印       |           |
| <b>指導教員</b>  | 所属部局・職   | 氏名             |           |
|  | 文学部キリスト教学科 教授  | 廣石 望 印         |           |
| <b>自然・人文・社会の別</b>  | 自然 ・ 人文 ・ 社会   | <b>個人・共同の別</b> | 個人 ・ 共同 名 |
| <b>研究課題</b>  | 『ヤコブ原福音書』におけるマリア<br>一周辺諸宗教の女性表象との関連をめぐって   |                |           |
| <b>研究組織</b><br>(研究代表者<br>・共同研究者)<br>※2020年3月現在<br>のものを記入 | 在籍研究科・専攻・課程・学年   | 氏名             |           |
|  | キリスト教学研究科<br>キリスト教学専攻博士前期課程 3年   | 川越 菜都美         |           |
| <b>研究期間</b>  | 2019 年度  |                |           |
| <b>研究経費</b><br>(1円単位)                                    | (支出金額) 199,642 円 / (採択金額) 200,000 円  |                |           |

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、『原福音書』において叙述されるマリアの身柄の所在と所属の変遷に着目し、「『原福音書』というテキストが、マリアを何者として描いているのか」を再記述した。その際本研究は、「『原福音書』に含まれる個々のエピソードと、同書テキスト外の並行事例との比較」というアプローチを用いた。具体的には、マリアと、各エピソードにおいてマリアが身を置く、父親ヨアキムの家、ヨセフの家、および神殿との関係という「所属する『家』」の観点から、同書におけるマリアのアイデンティティの分析を行った。結論として、マリアのアイデンティティは、「娘」「妻」として、「家」への所属によって規定できるものではない。同書においてマリアは、誰かの「娘」「妻」といった、ある男性の家に属する者ではなく、旧約における「神の箱」のごとく、神と民とに直属し、「神殿に代わる民の中心」「地上における神の顕現の場」としての役割を担う存在である。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 新約外典文書 ] [ テキスト比較 ] [ 所属とアイデンティティ ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、マリアの所属先の変遷の分析を通して、『原福音書』というテキストが、マリアを何者として描いているのか」という問いへの回答を試みた。研究成果は以下の通りである。

### マリアと二つの家

本稿第2章においては、父親ヨアキム、夫ヨセフとマリアとの関係性から、マリアの所属とアイデンティティを考察した。

#### 父ヨアキムの家

マリアとヨアキムとの関係は、家父長制上の父と娘の関係としては規定できない。ヨアキムはマリアを自らの娘としてではなく、自身が義人である証、および神殿への献納物として扱う。またヨアキムはマリアを神殿に送り出すと同時に物語から姿を消し(8:1)、以降マリアの人生に関与することはない。すなわち、ヨアキムはあくまでマリアの一時的な養育者にすぎない。

#### 後見人ヨセフの家

マリアは寡夫ヨセフの保護下にも身を置くが(9章以降)、二人の関係もまた、夫妻としては規定し得ない。ミシュナーの結婚にまつわる記述に照らせば、マリアとヨセフとの関係は、婚約とも結婚とも言い難い。ヨセフは神殿の祭司らにより、マリアを保護する役割を与えられたにすぎない。一方で、神殿はマリアの保護監督の役割をヨセフに委託した後も、マリアに対する影響力を保つ。

### マリアと神殿

本稿第3章では、マリアと神殿との関係を通して、マリアのアイデンティティを規定することを試みた。

マリアの神殿への移住は、祭司(7:7-8)、およびイスラエル全家(7:10)に歓迎される。聖所に居住する期間(7-8章)、マリアはウェスタの巫女のごとく、神殿と民とに直属する存在である。しかしマリアはやがて、初潮を機に神殿を退去させられ(8:4)、寡夫ヨセフの家へと移されることとなる(9:11)。

#### 初潮に伴う神殿退去、垂幕製織

マリアが神殿からヨセフの家に移された後も(9-12章)、マリアは依然として神殿に属する存在である。しかし神殿の祭司らは、もはやマリアを十全に管理できていない。この状況は、月経および妊娠という、マリアの性徴が契機となっている。マリアは垂幕の製織に連動し、祭司の知らぬ間に神の臨在の場へと変化していく。

#### 妊娠に伴う裁判と ἀπολύω

神殿退去後も神殿との関わりを保つマリアだが、やがて妊娠の発覚によって、大祭司による裁判に引き出されることとなる(15-16章)。結果、マリアの潔白が証明されるものの、マリアは神殿の祭司により、「解放/離縁(ἀπολύω)」という処遇を受ける(16:7)。

『原福音書』1-16章においては、家ではなく神殿がマリアにとっての所属先であり、マリアのアイデンティティを規定する存在であり続ける。しかし、祭司による「解放/離縁」(16:7)により、マリアは所属によるアイデンティティを喪失する。

### マリアとは何者か?

上記の議論を踏まえれば、『原福音書』のマリアは、誰かの「娘」「妻」といった、ある男性の家に属する者とは言い難い。また最終的にマリアは、神殿からも「解放/離縁」という処遇を受ける。したがってマリアのアイデンティティは、社会的所属によって規定できるものではない。

そこで、本稿第4章では、マリアのイエス出産時の描写を糸口に、『原福音書』全体を通じてマリアが獲得する諸アイデンティティを総括した。

## 研究成果の概要 つづき

## 「神の箱」マリア

マリアのイエス出産 (19:13-15) の瞬間、マリアがイエスを生む洞窟は「雲 (νεφέλη)」、次いで「光 (φῶς)」に包まれる。これらはいずれも、神の顕現の場に用いるべきモチーフである。このことから、『原福音書』19章では洞窟が、あたかも臨在の幕屋や神殿のような、神の顕現の場として描かれていると指摘できる。

この洞窟への神の顕現 (19:13-15) に続く場面で、助産婦の知人サロメはマリアの女性器に指を入れ、処女膜の存在を確認する (20:3)。するとサロメの手は焼失する (20:4)。

旧約聖書には、上記の場面のマリアのように、神の臨在の場に置かれ、触れた者に罰を下す物体の並行事例が存在する。その物体とは、神がその上に臨在するとされた「神の箱」である (出 25:22 他)。この場面において、洞窟は雲と光に包まれ、神の臨在の場と化す。また、「神の箱」に触れ命を落とすウザ (サム下 6:7) と同様に、マリアに触れたサロメはその手を失う (20:4)。

『原福音書』がマリアを「神の箱」として描いていると仮定すれば、マリアと父親ヨアキム、およびヨセフとの関係には、以下のような説明が可能である。マリアにとって両者は、旧約において「神の箱」を家に一時預かったアビナダブの息子エルアザル (サム上 7:1)、およびオベド・エドム (サム下 6:10-12) のような役割を担っている。ゆえに、両者は「神の箱」マリアを私有することができない。

マリアを「神の箱」として見た場合、マリアと神殿、および民との関係は以下のように説明できる。神殿に迎えられたマリアは、ダビデ (サム上 18:16) 同様「イスラエルのすべての家」に愛される (7:10)。また、マリアはウェスタの巫女のように、神殿と民とに直属する存在であった。しかしマリアにはダビデのような功績はなく、またウェスタの巫女のように祭儀に参加することもない。なんの事績もない女兒であるマリアが民に愛され、聖所に身を置くことができたのは、マリアが後に「神の箱」となる存在であるがゆえであった。そしてマリアは、神殿の垂幕を織るという行為に並行して、イエスの母、すなわち神の顕現の場、「神の箱」としての機能を備えつつあった。しかし神殿の祭司らは、マリアの身体的変化の意味に気付くことができない。

マリアの「神の箱」としての性質が示された後、神殿において、大祭司ザカリヤが王ヘロデにより殺害されるという事件が発生する (23:9)。この事件は、祭司によるマリアの「解放/離縁」 (16:7) が、「神の箱」の神殿からの喪失であったことを裏付ける。神殿における流血は忌避される (8:4) にもかかわらず、マリア喪失後の神殿ではザカリヤが殺害され (23:9)、祭壇の傍らに血痕が残される (24:4-5)。旧約において、「神の箱」への不当な扱いは災いを招く (サム下 6:7 他)。『原福音書』においても、祭司らは「神の箱」たるマリアの扱いを誤る。神殿の祭司らは、マリアの妊娠が「神の箱」への変化を意味することを理解せず、マリアを裁判にかける (15-16章)。かくして、神殿は「神の箱」マリアを失い、結果、神殿は汚損される。

マリアはベツレヘムへの道中の荒野において、「一方は泣き、他方は喜ぶ二つの民」を幻視する (17:9)。マリアを「神の箱」と捉えるならば、この「二つの民」が指すものも明らかとなる。マリアの行き着いた洞窟では、「イスラエルの王」 (20:10) と呼ばれるイエスが生まれる。他方エルサレムでは、王ヘロデがザカリヤを殺害し神殿を汚す (23:9)。こうして、新たな神の顕現の場マリアのもとでは新たな王が生まれ、マリアを失った神殿と、神殿に連なる民のもとには、もう一人の王の暴虐による悲しみがもたらされる。祭司はかつて、マリアを「イスラエルの民のあがない」と呼び祝福したが (7:8)、その約束は神殿を中心に置くイスラエルの民にではなく、マリアを中心とする新たな「民」の上に成就する。

## まとめ

『原福音書』におけるマリアは、家にも、また最終的には神殿にも属さない者となる。すなわち、マリアのアイデンティティは、所属によって規定できるものではない。そこで、本研究は、『原福音書』というテキストが、マリアを何者として描いているのか」という問いに対し、神殿に代わる民の中心、および神の顕現の場、すなわち「神の箱」であるという答えを提示する。

**研究発表** (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて提出してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

なし

② 図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)

なし

④ その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

日本聖書学研究所 2020年4月例会 (日本聖書神学校、4月20日) にて研究発表予定  
題目 『『神の箱』マリア——『ヤコブ原福音書』におけるマリアの所属とアイデンティティ——』